翻訳

現代語版『小説神髄』（八）

坂井　健

はじめに

『小説神髄』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強するべきだというのは、なるほどそのとおりだとは思うけれども、実際に、『小説神髄』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ないし、とくに、この本を読んでほしいと思う、大学二、三年生ではほとんどいないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髄』の現代語訳をすることにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかにれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙選集』（中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月）、岩波文庫『小説神髄』（宗像和重解説、二〇一〇年六月）に詳細な注があるので、ここでは最小限にとどめた。また、柳田泉『『小説神髄』研究』（春秋社、昭和四一年）に詳しい解説がある。これらの先行研究にはさまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。柳田氏の著作には、本文の解釈に相当する部分があるが、本稿では、なるべく直訳を心がけた。

日本近代文学大系は、『逍遙選集』別冊第三を底本とし、初版本（松月堂、明治一八～一九年）を参照したとある。なお、柳田泉氏による岩波文庫本に初出と『逍遙選集』の異同についての注記があるほか、宗像和重氏の解説本は、『逍遙選集』を底本として、初出との対照表を付している。

本稿では、若き日の逍遙の口吻を髣髴とさせたいと思い、初出本に拠った。本稿は、『小説神髄』を原文のままに理解したくても、できずにもどかしがっている初学者を念頭において訳したものである。

（第二）俗文体

俗文体は通俗的な文によって、そのまま文章を作ったものである。

だから、文字の意味は平易で、ただ理解しやすい長所があるばかりでなく、それ以外に、生き生きとした力があるので、いわゆる文芸作品に必要な、簡易で品格や明晰な品格はもちろん、才知がすぐれ、勇ましい勢いがあり、昔を懐かしく思い起こす心持を引き起こすことのできる品格もある。それだけではなく、心の底からの感情を表し出して、優れていることもある。こういうわけで西洋の諸国は、もちろん、中国のようなところも、小説には、地の文以外には、なるべく通俗的な言葉を用いて、事物のありさまを写すことである。俗文体の有利な点は、すでにこのようであるが、ただ、どうにもわが国では、言文一致になっていないので、文章上で用いる言葉と、普段の会話に用いる言葉とは、まるで氷と炭のように違っている。であるから、俗語のままに文章を書くときは、あるいは音調が野蛮になり、あるいは、その気韻が野暮ったくなって、とてもみやびな趣向でさえ、そのために田舎びたものとなって、いやしくみだらであるとの非難を受けることが多いのである。しかも、西洋とは事情が違って、言語の移り変わりが激しいばかりか、わずか数百里以内であっても、その方言が異なることは、あのイギリスとフランスの国語がお互いに異なっているのと同じようなものもある。だから、時代ものの小説には、この文体を用いることはきわめて不適切のかぎりであって、かつ、不都合であることというべきである。ただ、あの現代の物語（世話物語）[1]をこの文体によって書いたならば、感情も文章も両方ともお互いに合致して、非常に詳しく優れたものになるだろうが、それでさえいくらか手心を加えて、折衷しなければうまくいかない。あの為永派[2]の作者であっても、やや厳格な部分にいたると、ときおりは演劇の台詞めいた言葉をいくらか借りて使って、俗語では言うことのできない不都合な部分を補っていたのは、読者も知っていることだろう。曲亭馬琴はかつて言った[3]。

「中国で俗語によって綴った文章に正式の文章があり、方言がある。そうでなければ役に立たない。また、儒教の書物、医術の書物、仏教の書物は、正式な文章であるべきものであるが、その中に俗語があるのは『二程全書』[4]、『朱子語類』[5]である。俗語によって書いたのは、『奇功新事』[6]、『傷寒條弁』[7]、『虚堂録』[8]、『光明蔵』[9]の類の他、まだあるだろう。先輩がすでにこのように使っている。こういうわけだから、その文学というものも、言霊の助けを借りなければ、思うように文を作ることができない。まして皇国の文章は、和漢雅俗古今のちがいがある。それを今、文学世界で働くものが、どうしてよくすべてに精通することができようか。まったく難しいことではないか。思うに、昔の草紙、物語、『竹取物語』、『宇津保物語』、『源氏物語』なども、作者はできるかぎりその言葉を研究し、選んで書いたものではないだろう。きっと、これはその頃の貴族たちの日常語や方言さえも、そのままに載せたものだろうが、古語はそれ自体卑俗なものではないし、しかも、宮女の言葉には雅俗そのままに任せたものもあるが、才子、才女はその性質も違っていて、かつ文章に優れているので、後の和文の手本ともなっている。こういうわけだから、昔の草子、物語は、ここでも俗語によって書かれたことを思うべきである。和文、漢文は、その文章はちがっているが、人間のありさまをうまく描写

することができて、その趣を描きつくすことができるのは、俗語でなければすることができない。このことは中国も日本も同じである。だからといって、現在、この間の俚言、俗語の変化や聞きとれない言葉をそのまま文章にしてはいけない。私の文章に整っていなくて入り混じっていて文章があるのは、この分かりにくい言葉、卑俗な言葉にならないようにしてである。」云々

俗語に不都合なところが多いことは馬琴翁の言うとおりである。私も、この議論に賛成しないわけにはいかないが、しかし、いくらかはこの議論と意見の違うところも無いわけではないので、いささか持論を論述して、さらに俗文を論じ、明らかにしたい。

そもそも小説は、人々の生活のありさまを写すことをもって、その本質とするものである。だから下流の生活のありさまを写し出そうとするときには、その人物の言葉などに、田舎びていやしい言葉があるのは、もとより逃れがたいことであるよ。その様子さえ写し出したなら、かりにその言葉は田舎びていても、これはかえって下流社会の本当の姿にほかならないので、このことによって俗語を我が国の小説に使ってはいけない言葉であるということはできない。ディッケンズ翁[10]の小説、および、フィールディング翁[11]の歴史小説などには、ずいぶんはなはだしい俗語などをいくらともなく使っているが、だからといってディッケンズをそしって、批評したものもないし、また、フィールディング翁を罵るものもない。フィールディング翁の著作は田舎びてみだらだといって排斥するものは多いけれど、それは趣向が田舎びてみだらだということから出たことであって、文章の上にいうことではない。こういうわけだから、なまった方言であっても、聞き取りにくい俗語であっても、その場合、場合に応じて用いると、けっしていけないということはなく、かえって、趣が深いだろう。とはいえ、わが国の俗語、日常語は、とかく冗長な欠点がある。さらに、語法に決まったリズムがなく、かつ、音調が美しくないので、叙文（事物のいわれを序する文章をいう。）、ならびに、紀文（事物のありさま、性質などを記述するもの。）には、使っても面白くないところが多い。思うに、それが冗長になってしまう原因は、わが国本来のやさしくやわらかなやまと言葉に由来するのであろうし、その用語法に決まったリズムがなく、かつその音調が美しくないのは、日本と中国の言語、なまった方言がお互いに混ざったこと基づくのだろう。そのうえ、俗語には三種類の区別があって、上流の人に対する言葉と、同等の人に対する言葉と、下流の人に対する言葉と、それぞれ著しいちがいがあって、あの西洋の言語とは異なっている。そして、同等以下の人に対する言葉のようなものは、まったく過去と現在と未来との区別のないものがある。たとえば、「少しも行方が分からなかったので」という叙事体の文を書くときにも、「少しも、行方が分からないので」ともいうことができるし、「とんと行方が知れなかったものだから」ともいうことができるし、「少しも行方が分からなんものだから」ともいうことができるだろう。そして、第二と第三とは、俗語中の俗語であって、もっともいやしい言葉なので、まず、第一の言葉をとって叙述するのがまちがいない。ところが、第一の言葉のようなものは、いわゆる現在の言語であるから、すでに過ぎ去った来歴などを叙述するには最も

適しているとは言えない。イギリスの文法にも、歴史的現在といわれている一種の用語法があるけれども、時たま使うものであって、いつも使うものではない。とても長々しい来歴を、日本の冗長な言語によって過去、現在の区別をしないで、くだくだしく述べていくならば、ついには、前後が混乱し、ものごとの順序が分からなくなってしまうこともあるだろう。これでは、第一に、読者に飽きる気分を起こさせてしまう。だから、私は、断じて言う。俗語によって物語の言葉（物語に現れた人物の言葉）を写すのは差支えがない。ただし、地の文にいたっては、（我が国の俗語に一大改良がおこなわれない間は）俗語によって写してはいけない。思うに、このために物語の進歩を妨げるのではないかと恐れるからである。

左に為永派の人情本の跋文[12]を挙げる。一読して、その長所と短所を窺うことができる。

○孝道無二の丈夫であるのに、なまじ人情に引かされて、そのまま長者のもとに戻り、義理ある父と注太夫にせめて一筆書き残そうと、硯を引き寄せ摺り流す墨も涙ににじみがち。事情を知らないので娘のお梅は、唐紙を開けて、手をついて、梅「こんちは、お寺参りからどちらへいらっしゃいました。」源「おふくろの仏壇から久しぶりで方々へ歩いて来ました。（中略）源「おお、でかした、でかした。それでこそ武士の妻。卑怯未練の源太左衛門何ほどのことがあろう。本望を遂げるのは、またたくまだ。必ず吉左右まっていろ。」といって、雨戸を細めに開け、外を眺めて、源「思いのほかに夜も更けた様子。今から出かけるから、父上と忠太夫にこの書置き差し上げておくれ。梅「それではもうお出かけになるのですか。ずいぶんお体を大切に。源「お前も体に気を付けて」とすこし声を低くして。源「おまきさんが下さるものをうっかりと食べないように。その他おまきさんからおとっさんにあげる物には気を付けて。身体を大事に時間を待ちな。」梅「ハイ」と答えて取り出だす。刀で切るのではないが、ひょっとしたらこのまま二人の縁は切れてしまうのではないか、刀に巻く柄糸の「つか」ではいが、つかのまも忘れずことができず、刀のさやの割笄が分かれているのではないが、二人は別れても、刀の鞘を結ぶ下緒のように結ばれる時がある、と両目に浮かぶ涙を見せまいとして云々　（松亭金水）

右に載せたものはいわゆる俗文体の文章であるが、地の文には雅語を混ぜて使って、俗語八分の文章としている。思うに、先ほど述べた多くの不都合があるためである。地の文章と言葉の文章とがこのような氷と炭のような違いがあるのは、また致し方のないことであるが、同じ言葉の文句の中で、まるで時代が違っているように、その性質が異なっているのは、実に面白くないことではないか。たとえば、前の文章中の「おお、でかした、云々」の語は、いわゆる芝居の台詞であって、今の世の人の言語ではない。前後の言葉と比べてみたなら、不都合の欠点がないとはいうことができない。これが我が国の通常の言葉の不便さから生じたことであって、作者を非難するかぎりではないが、これらは俗文の真髄である活き活きとした面白さを損なうことがある。もとより望ましいことではない。これはしかしながら、文章の

性質がその物語の性質にふさわしくなくて、言い表すべき情緒も言いつくすことができないことによることである。だから、前段に言ったように、時代ものを書くときには、俗文体を用いることは、きわめて不都合が多いだろうから、雅俗の言葉を折衷した別の文体を用いて、その趣を現すべきである。

現代ものを書くときにも、地の文は、しかたなく雅文をいくらか取り混ぜて、叙事をする便宜に使うことができることは、すでに前にも言ったとおりである。とはいえ、雅俗折衷の地の文と、まったく俗語によって書いた言葉との折衷する加減は、実に簡単ではない技術なので、この文体を使う人たちは、充分気を付けなければ、うまくいくことは極めて難しいことだろう。たとえば、馬琴得意の文体で地の文を書いた続きに、為永得意のベランメイ、オヨシナサイナなどのような言葉を書きだしたなら、地の文と台詞とがまったく撞着する勢いがあって、口調も自然と穏やかではないだろう。だからといって、この撞着をなくするために地の文をあまりに俗文体にかたよらせたならば、あの意気盛んな様子を写し出すのに不都合であろう。これが第一の問題であることだ。だから、俗文体を使おうとするならば、一種類の文体とするのがよい。けっして馬琴の文と春水の文とを合わせて、地の文と台詞を記そうと企ててはならない。そのようなことをするなら、以前のとおりに人情本の文章を書くのにも劣って拙劣である。俗語などは、卑しいもののようだが、決してそうではない。作者であろうとするものは、よくよくこのあたりを考えなければならない。以前に俗語は、意味の分からぬ言葉が多く、なまった言葉、田舎の言葉が多いと言ったので、読者は私がきっと俗語を内々貶めたと思っただろうが、それは、また、はなはだしい誤りである。言葉は魂である。文は形である。俗語には、七情[13]すべてが化粧をほどこさないで現れるが、文章には、七情も、みな紅、おしろいをほどこして現れ、幾分かは実を失うところがある。俗語のままに言葉を写すと、差し向かいで談話するような興味がある。雅俗折衷の文章で台詞を綴ると、手紙を読む思いがする。その面白みが薄いことは言うまでもないことである。俗文の利益はすでにこのようである。ただ、残念なことに、世の中にその不都合を除く方法がない。ああ、私の仲間の才子よ、誰がこの方法を表し出すだろうか。

私は今から首を長くして新しい俗文体が世に出る日を待つものである。

〔注〕

(1)現代を舞台とする小説のこと。

(2)為永派・染崎延房（二世為永春水）および、その弟子たちを指す。

(3)曲亭馬琴はかつて言った・以下は、『南総里見八犬伝』第九輯下帙中巻第十九の「簡端贅言」の後半部分からの引用。

(4)『二程全書』・北宋の程顥、程頤兄弟の文章を集めたもの。宋学の先駆となった。

(5)『朱子語類』・南宋の思想家朱熹の語録。門人が集めたもの。

(6)『奇功新事』・未詳。

(7)『傷寒條弁』・『傷寒論』は、後漢の張機によるとされる古医書。漢方医の聖典。

(8)『虚堂録』・南宋の禅僧虚智愚の語録。

(9)『光明蔵』・南宋橘洲少曇編の禅宗史。

(10)ディケンズ翁・Charles Dickens（一八一二～七〇）イギリスの小説

家。代表作に『二都物語』、『クリスマス・カロル』など。
(11)フィールディング翁・Henry Fielding（一七〇七～五四）イギリスの小説家。代表作に『トム・ジョーンズ』がある。
(12)為永派の人情本の跋文・本文に松亭金水とあり、『鶯塚千代廼初声』の一節と岩波文庫の注（宗像和重氏による。）にもあるが、実際には、山々亭有人による続編、三巻の上の一節である。
(13)七情・七つの感情。喜、怒、哀、楽、哀、悪、欲。

（第三）雅俗折衷文体

雅俗折衷の文体は、一つでは足りない。さらに大別して二種とする。一つを読み本体と称し、一つを草子体と称する。

（甲）読み本体は、地の文章を綴るには雅語七、八分の雅俗折衷の文体を用い、台詞を綴るのには、雅言五、六分の雅俗折衷の文体を用いる。したがって、地の文と台詞の文とがお互いに喰いちがうような心配もなく、みやびな様子を述べるのには、雅語を用いて述べ、粗野な趣を述べるには俗語を使って述べ、臨機応変に貴賤雅俗を写し分けるのに便利である。かつ、中国の言葉をさえ、その折々に交えて使って、国語の不足を補うことなので、美しくたおやかな場面になると和文のみやびやかなものを使ってこれを彩り、いきおいの激しい模様を述べるときには、漢語の雄健なものを用いて、その足りないところを補い、俗語を六、七分交えて使っては、はるかに離れた田舎の様子をはっきりと写し出し、雅語を八、九分用いては、雲上人の遠い昔の言葉もその文面に表すことができる。時代物語を綴ろうとするなら、これと比べることのできる良い文体が他にあるとも思わないのである。現代ものの小説のようなものも、あるいは、この文体でつづることができないわけではないが、他の俗文体、草双紙体などに比べると、一歩譲るところがあるだろうか。思うに、その台詞が一種の特質をもっていて、今の言葉に比べると大いに異なるところがあるからである。だから、現代ものの小説には、この文体を用いないことは、かえって当然と思われるのだ。

雅俗折衷の加減さえ、うまくいったならば、時代物語に適する文章は、実にこの文の他にはないだろう。とはいっても、雅俗折衷の加減、塩梅は、とても簡単なことではないので、なお幼稚なエセ作家は、これを使おうと企てながら、まったく読むに煩わしい、卑しい、俗な文章を作ることがある。試みに、一つ二つその難点を挙げていうなら、まず、第一にみやびな調子に偏りやすいことである。初心の作者が綴った読み本体の文を見ると、だいたいみやびな調子に傾いて（作者がもし古典に詳しい者であれば）、文法にばかり心を配って、貴賤の言葉に区別なく、言葉と言葉が切れ切れになって、読むのに美しくない文を作るか、そうでなければ、音調ばかりにのみ心を用いて、長歌のような、今様歌[1]のような文章を書いて、事物の活動の勢いを失うものが多い。かりそめにも雅語を用いるからには、文法を守ることは、もちろん、当然のことだけれども、そうかといってあまりに文法ばかりにまったく心を奪われて、小説、稗史の本分である人の心や世のありさまを写すことができないなら、まことに利益の少ないことというべきである。

第二には、俗文体に偏ることがこれである。和文を深く心得ていない連中が、なまじっかに多く俗語を交えて使おうと試みるときには、だいたい浄瑠璃本、または、端唄[2]めいた文体に流れやすく、音調が滑らかなところもあるけれど、その声はいやしくて少しも読むに耐えないものがある。瀬川如幸[3]が著した『鼎臣録』[4]のようなものは、ややこのそしりを免れることができないだろう。

〔注〕

(1)今様歌（いまようううた）平安中期に起った新様式の歌謡であるが、ここでは七五調の仏教歌謡の和讃などを指す。

(2)端唄（はうた）・江戸時代後期に流行した俗曲。三味線で伴奏し、歌詞が短い。

(3)瀬川如皐（せがわ・じょこう・一八〇六～一八八一）歌舞伎作者。「東山桜荘子」、「与話情浮名横櫛」など。

(4)鼎臣録（ていしんろく）・『木曾義仲鼎臣録』。木曾義仲にしたがう忠臣と巴御前を描いた読本。

（以下次号）

〔付記〕

本稿は、江蘇省社会科学基金「坪内逍遙文論中的中国文化要素研究」（蘇州大学、研究代表者　潘文東、二〇一六～二〇一九年）による成果の一部である。

（さかい　たけし　日本文学科）

二〇一八年十一月十四日受理